

補瀉と虚実、異なる考え方：今と昔における臨床の考察

ステーブン・バーチ

まず初めに、難解かつ重要な概念である補瀉・虚実に関する特集を組んでくれたNAJOMを賞賛したいと思う。今まで多くの鍼灸師がそうであったように、私もいろいろな概念、臨床評価、手技などの理解に奮闘してきた。NAJOMの19巻54号で取り上げられた虚実・補瀉の様々な見解は実に興味深く、私も更なる見解を加えてみようと思っただけだった。しかし、何かおもしろくて役に立つことが述べられるのか自信がない。それでも、その探求をやめずにいることも事実であるが、もしこれから言及する事が単調なものになってしまったならば、陳謝する。私の師の一人である間中喜雄先生は、「補瀉・虚実とは誰が、どこで、どのような意味を持って使うかによって異なる」とおっしゃった。恐らくこの勧告に従うべきであろう。先生は、鍼灸の書には補瀉・虚実の奥深さや複雑さについての説明が十分になされていないと感じていたゆえに、深く言及することはしなかったのだ。しかし私は、間中先生ほど賢くないのであえて言及する。

方法論の差異

内経と難経では、補瀉において刺鍼時の手技が実におもしろいほど大きく異なっている。この違いは虚実の概念、そして補瀉の目的とその影響の差異を明白に提示している。

内経の革新的な部分は、虚の状態を引き起こすものが病気の元であるとしたことである。例えば、情緒不安定で虚の状態が起こると、環境の影響を受ける、つまり邪気の体内への進入を許し、病気やその他の症状が起こる。内経は、鍼を治療の道具とし、鍼師の心持と正しい手技により気が至り、気が強化される、としている。補いが十分であれば、邪気を排出することができる。(文字通り、散る、となる。)これが不十分であれば、瀉を使って邪気を払い、結果的に体内より除去されることになる。従って内経の基本的な補瀉法は、気を補って邪気を払うことである。

これに反して、難経は全く異なる補瀉の表現をしている。気を二つのレベルに捉え、経脈からより表面を流れるものと、経脈の中を流れるものとしている。これは、内経にある、経脈を流れる榮気と経脈の外を流れる衛気があるという概念と一致する。難経では補を達成させるために皮膚を触ることにより気を集め(得

気)、経脈に届く寸前のレベルまで軽く刺鍼する。気が至ったらずに鍼を経脈の中までですすめ、経脈に集めた気を入れる。補するということは、経脈中の気の容量を増やす、ということになる。反して瀉は皮膚を触ることにより気が得られてから鍼を経脈のレベルまで深く刺鍼し、気を得たらすぐに鍼をより表面まで引き抜き、経脈中の気の容量を減らす事を言う。ウンシュールド(Paul Unschuld ポール・ウンシュールド: ドイツ人の中国古典医学・文化・理論の学者で、多くの著書がある)は、これを「内部交換」と表現している。難経や様々な解説者は、より表面を流れる気を衛気、より深いところを流れる気を榮気としているが、この命名には首を傾げざるをえない。この手技の説明では、衛気と榮気は内部交換ができるものということになる。恐らく多くの者はこれらの気は弾力性のような性質があるものとして捉えて、内部交換ができる気という考え方は好まないだろう。私が推測するに難経には、陰陽のバランスと、それが及ぼす全体の気(生氣のような)への効果、というような別の考え方が含まれているのではないかと思う。(「生氣」については下で詳細する。)

内経と難経の違いは、他にもある。霊枢第一では、内経の他の章の起源と考えられている手技に関しての記述がある。「迎而奪之 悪得無虚 追而濟之 悪得無實 - 迎えて之を奪えば、いづくにか虚無きを得ん、追いて之を濟せば、いづくにか実無きを得ん。」

“それ(気)に遭い、それ(気)を持ち去れば、どうして(気の)虚を得ることができないことがあるのでしょうか、それ(気)を獲得し、それ(気)を援助すれば、どうして(気の)実を得ることができないことがあるのでしょうか”[Chace, Bensky 2009]。

ほとんどの訳は「経脈の流れに沿って鍼を向ければ、どうして補を生み出せないことがあるでしょう。」そして「経脈の流れに逆らって鍼を向ければ、どうして瀉を生み出せないことがあるでしょう。」としている。この文章は文法の範疇で言うところの必然を使っている。例えば、もしXをすれば補に作用する、もしYをすれば瀉に作用する、というように。このように断定されると皆その様にしたくなる。しかし、刺鍼の方向のみがこの重要な一節の解釈方ではない。

難経七十九難に、この一節を少し修正した記述がある。「迎而奪之 安得無虚 隨而濟之 安得無實 - 迎えて之を奪わば、いづくにぞ虚なきを得ん、隨いてこれを濟わば、いづくにぞ実なきをえん。」そして五行相生関係を用い六十九難を説明している。「虚すればその母を補い、実すればその子を生ずる。」[Unschuld 1986:583]

難経のこの一文は、慎重に五行相生関係を適用し経穴・経脈を選べば補瀉は成される、と説いている。これは、内経の原文にある補瀉の刺鍼法の基本に関する(一般的な)解釈とは全く違う記述である。

鍼を使って直接気を増減させることに焦点を合わせるよりも、難経では五行相生関係を利用してバランスを回復させることによって補瀉が得られる、と一貫して主張しているようだ。これは、難経における補瀉の刺鍼法が、陰陽のバランスを作り出す(より表層と深層の気の交換)、ということに通づるものがある。

では、内経と難経の二つの異なる補瀉論には共通点はあるのだろうか。虚実の本質についてはどのような含みがあるのだろうか。このような難問には誰も答えがらないだろうし、ここで止めておいた方が賢明なのだろうが、少し考えがあるのでそれを読者と共有したいと思う。

内経の原型は、気の調整を助ける為に経脈の虚実を正すところにあるとする。霊枢第七十五には、鍼治療の定義がこう記されている。「鍼は気を調整する」[Rochat de la Vallee 2006:79] 経脈の虚は補法、つまり気を経脈に補うことによって正され、瀉法を使って邪気を追い出すことによって実が正される。両者の刺鍼法は施術者の心持や技能のレベルによることになる。難経では、異なったレベルの気(陰陽/表裏)のバランスを整えるために、集めた気を体内で廻らせるという、再生可能と捉えることができる手技に着目している。そしてどの施術者にもできる、七十九難や六十九難の原理に基づいた、五行相生関係を取り入れた治療を推奨している。

内経の原型は、補の手技がどう作用するかについて、すべては語られていない。どのような気が関与しているのか、が明白にされていないからである。難経は、これに関してより明白であるように思える。体の異なるレベルにある気を、手技によって循環させているので、よりバランスを意識した考え方になっている。このような刺鍼法の表現には、榮気と衛気は陰陽の表れとして基本的に同じ気である、という考えが背景にある。この補瀉の手技は、二つのレベルの二つの気を行き来させることで、あるものから他のものに変えることではない。その代わり、気を違う深さや場所に巧みに操る結果、機能の変化をもたらす、陰陽のバランスをはかる考え方のように思える。この点に着目したのは、ウンシュールドにおいて他にはいない。ここに語られる気というものは識別されない性質、つまり体のすべてを包み込む大域的な気であり、施術者が治療に導きやすいように場所や動き、機能によって異なる名前を付けられたのだ。[Birch

2009, Chiu 1986, Rochat de la Vallee 2006, Unschuld 2003]

この体のすべてを包み込む大域的な気、または自然治癒力は、難経ではどのように書かれているのだろうか。難経のモデルは、八難に書かれている生気を基にしているようだ。この生気は「腎間の動気」を起源とし、気、臟腑、経脈、三焦といった全ての体の機能の基礎となる。その関係をウンシュルドが解釈した八難に、このように書かれている。

「十二経脈はすべて生気の起源と関係している。生気の元は十二経脈の根幹と基礎のことである。つまりこれは、腎の間の動気のことである。この気が（体の）五臟六腑の元となり、これが十二経脈の根幹である。これは呼吸の門であり、三焦の起源である。これを守邪の神とも呼ぶ。従って腎間の（動）気は、人の根幹であり基礎である。」[Unschuld 1986:130]

故に、生気がより健康な状態にある時には、体は必要に応じて機能し易くなる、と考えられる。難経の考え方で、鍼灸師の仕事は気がある場所から別の場所へと動かすことだというのは、恐らく生気のこの役目を遂行しやすくするためだと思われる。難経の考え方は経脈の中と経脈の上を行き来する気を動かし、五行相生関係を存分に使うことにある。これに対して内経では体が自己管理できるという考え方までにはそれほど発展しなかったようだ。そして、体が自主的に調整するのを待つということではなく、そのイメージ、言の使い方としては必要に応じて気を体に加え、もしそれが不十分であれば、障害になっている気を体内から取り除くという考えだ。

これらの古典の考えの違いは、補瀉がどのように行われるかという具体的な表現と、その背景にあるイメージと理論により明らかである。

鍼によっていかに自然治癒力を高められるかは、他の論拠も示されてる。馬王堆の房中書である和陰陽（紀元前約168年）は、気が至ることをこのように表現している。「気が至り、血や気が体内を廻り、耳や目が感覚鋭く、視界が開ける。皮膚もつやが出、声は澄み、背中、もも、尻はしっかりして、人は神聖な輝きをもつ。」[Lo, Li 2010:381] 内経と難経は、共通して刺鍼法の効果を発揮するためには、気を至らせる必要があると説いている。恐らく、和陰陽などの書物を基にした気の至り自体が、活力を促進する（気と血が流れ、五感が鋭くなり、皮膚の光沢が増し、肉体が強くなる）という共通の認識があったのだろう。そして補瀉は、気が至った後に体のバランスと秩序を回復するために行われる、といった考えだったのだろう。

これまでに私が論じてきた考えは、現代の補瀉の考え方とそれが生み出す虚実に対する効果と

は、かなり異なるものである。現代の書物は、身体の機能的システムが虚実の状態へ進む、そして、補法と瀉法はこうしてできた虚や実の状態を正す、という仮説的理論に集中する傾向にある。

初期の鍼の文献においては、このような考え方は確立されていなかったと私は思う。（それは説明が不明瞭なのか、そのような考え方が意図されていなかったのか、どちらなのかはわからない。）その代わり初期の文献は、生気の虚をいかにして修正するかということと、生気の機能を害す邪気をどのように除くかに、焦点を合わせている。

補瀉の手技は、施術者自身が内なる変化を作り出すことによって気に働きかける（気を至らせる）ため、施術者の技量にかかっていた。体のバランスを保つために、虚と実が現れた特定の経脈に補瀉で働きかけることで、生気のよりよい状態をもたらすことができる。バランスが保たれ、体内に生気が行き渡ると治癒がなされ、疾患が癒え、患者のよりよい生理状態がもたらされる。私は、これを生気（大域的な気）によるものとする。私はこの考えに基づき三年前に初期的段階の論文を出版したのだが、これは脈診で得られた微細な変化に着目し、補を行うと何が起こるのかをまとめたものだった。[Birch 2009] オーストラリアの仲間と共に、私は本治法（虚に対し補法を使い、実に対し瀉法を使う）に対する脈の変化を研究した。脈が変化する生理的メカニズムを解明し、本治法をさらに深く理解する為の研究だった。この研究で本治法の効果として、体内に根本的な変化が起こることを確認した。この根本的な変化は、最も初期の経脈に関する論文がいうところの“脈診を通して経絡の状態を知るべきである”というまさに経絡理論の大前提である考えを裏付けている。霊枢十章には「絡脈はよく見られるが、経脈は見えない。虚実を判断するには脈を診なければならぬ」とある。[Wu 1997 & Matsumoto, Birch 1983]

私達が経絡の状態と変動を知るのには、脈によってである。これによって経絡における虚実の状態と補瀉の効果を具体的に知ることができる。経絡治療で使われる現代の刺鍼法や、東洋はり医学会の補法などを例に挙げると、それらは様々な文献を基にした伝統的な考え方を、実用的に再生したものだと言える。これらの中には、内経や難経の考えとは相反するように思われるものも含まれている。

これらは、多くの補や瀉に関する考え方、たとえば灸療法や漢方のものとは大きく異なる。補強剤としてのお灸の効果は、灸の治療のあとにしばしば見受けられるが、灸の刺激は様々な生

理反応を引き起こし、生理的指標を改善し、体をいい状態に導く。こういった効果はモクサアフリカ (Moxafrica: アフリカに於ける灸療法による支援活動) によるすばらしい報告などで見られる。

灸の補の効果は、時の経過とともに徐々に現れる。漢方薬でも同じ様に、薬草の成分が体内の器官に徐々に達することによって、生理的変化が徐々に現れる。鍼治療では、補瀉の手技によって鍼をした直後に測定可能な変化が認められる。[Birch 2009] この様に、「補」と「瀉」という言葉は上の三つの施術方法で同じ様に使われるが、生理学的にも時間的にも全く違う効果がある。

従って補と瀉は、使われる伝統と術式によってはかなり異なる概念のようだ。ここでは私自身、鍼が専門なので、鍼について言及したが、補瀉という言葉を意識して用心深く使っていた間中先生の警告に、周りまわって戻って来た気がする。

初めに述べたように、補瀉について深く語るべきではなかったかもしれないが、これらは、いままでの臨床で遭遇してきた事実から、私の中では筋が通っている。NAJOMの19巻54号の諸々の記事の中には、これらの考え方の違いを明確に指摘していないものがあつたように思われる。ここまで読んで下さった読者に感謝したい。これによって更に混乱する人がいないことを祈る。

翻訳：戸田さやか

文献は英文の記事を参照してください。

スティーヴン・バーチ

オスロの保健科学大学、準教授。1982年より日本鍼灸を専門に治療活動を行う。間中喜雄、福島弘道、柳上登志夫、高井明などに師事する。共著を含めて、現在までに日本鍼灸について8冊の著作がある。ヨーロッパで教授活動をし、かつ伝統鍼灸の科学的リサーチに従事する。